

自重しない日本国を召喚

スカツド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作の日本が持っていた自制心や理性を全て取っ払ったらいったいどうなってしまうでしょう。

パーパルディア外務局の窓口で偉そうにされたり、グラ・バルカスの外交官に挑発される度にいちいち切れて爆発していたら話が破綻してしまうのでしょうか。

そんな良識というリミッターを解除した日本国を暴走させてみました。

書いてみて分かったことは好き勝手やり過ぎると返って面白く無くなってしまうということでした……

目次

第1話	赤鬼は泣いているか？	1
第2話	短気な人たち	10
第3話	遠い国からやって来た人たち	21
第4話	食べる！鹿煎餅を	32
第5話	滅ぼせ！レイフォルを	46
第6話	滅ぼせ！パガンダを	54
第7話	滅ぼせ！グラ・バルカスを	65

第1話 赤鬼は泣いているか？

中央暦1639年3月22日午前 首相官邸 オーバルルーム

このヘンテコな異世界に日本国が転移してからそろそろ二ヶ月余りの日々が過ぎようとしていた。

「それで？ クワ・トイネは約束分の食料を輸出する事が出来ないと言っているんだな？」

「いいえ、違います。輸出することが難しくなってきたと言っているのです」

丸眼鏡のブリッジを左手中指でクイツと持ち上げながら食料産業局の近藤局長は答えた。

「いったい何があつたんだね、局長？ まさか値上げ要求じゃなからうな？」

「いえいえ、そんな話ではありません。クワ・トイネの西方、ロウリアとの国境が騒がしくなっているようです。正確な数は未確認ですが膨大な兵を集めているのは間違いありません」

「戦争の脅威が迫っているということだな。んで、クワ・トイネに勝ち目はあるのか？ 勝てるとしても戦争に注力すれば食糧輸出どころではないぞ」

「残念ながら全面戦争となればクワ・トイネに勝ち目はありません。そして仮にロウリアがあつさり勝利し、彼らと友好関係を結べたとしても食糧輸出再開まで最短で数ヶ月を要するのは間違いないでしょう」

近藤局長はまるで他人事みたいに気楽に言つて退けた。まあ、本当に他人事なだけども。

だが、居並ぶ閣僚たちにとっては他人事ではないらしい。苦虫を噛み潰したような顔で互いに顔色を伺い合う。

やがて火中の栗を拾うように首相が口を開いた。

「ロウリア？ だっけかな？ そいつらに開戦を思い留まらせる事は出来そうかな？ なるべく安上がりで」

「極めて難しいと思われます。ロウリア王のハーク・ロウリア三十四世とやらは亜人根絶を主張しているようです。金では動かんでしよう」

「しようがない、先制的自衛権を行使しよう。それが一番安上がりだ。攻撃プランを策定してくれ。どれくらい掛かる？」

「既にいくつかのプランが出来上がっております。安上がりな順にご説明致しますよう」

ドヤ顔の防衛大臣は顎をしゃくるとプロジェクトエクターを操作した。

中央暦1639年3月29日夜　ロウリア王国　王都ジン・ハーク上空

王都ジン・ハーク沖五百キロに浮かぶヘリコプター搭載護衛艦いぶきのスキージャンプから発艦したF-35Bは高度五万フィートを五百ノットで飛行していた。

電子・光学式照準システムEOTSで撮影された映像がいぶきCICの大型モニターに表示されている。

「どうですか、先生？」

「これが滑走路ですから……　ワイバーンの厩舎はこれですね。だとすると竜騎士の宿舎はこちらでしょう」

マイハーク防衛騎士団団長イーネがドヤ顔を浮かべながらモニターのあちらこちらを指で指し示す。

オペレーターはコンソールを操作してマップ上に次々とマーカーを設定して行く。

「先生、ありがとうございます。聞いての通りだ。幸いにも今日は少し風が強い。お陰で下の連中は気付いていないようだ。それにもし気付かれても夜だからワイバーンは出てこないと思われる。だが、急ぐに越したことはないな。攻撃を開始せよ」

「了解！」

偵察のF-35Bは上空で旋回を続ける。新たに発艦した五機のF-35Bは目標から三十キロほど手前で二千ポンドLJDAMを二発ずつ投下した。

「アレって自分でレーザー照射しないといけないんでしょう？ 大変ですねえ」

「まあ、ほとんど機械が勝手にやってくれてるんですけどね」

爆弾が命中するまでにたつぷり五分は掛かる。十発の二千ポンド爆弾は寸分違わぬ精度で命中した。滑走路はズタズタになり厩舎や宿舎も全壊してしまう。

続いて六機のF-35BがMark77七百五十ポンド焼夷爆弾を機外ハードポイントに七発ずつ搭載して軍港へと向かう。

従来型の焼夷弾は特定通常兵器使用禁止制限条約の附属議定書の三において文民や人口密集地付近の目標に対して使用することを禁止された。この焼夷爆弾は条約を回避するために作られた物なのだ。従来型はガソリンを主成分としていた。それを灯油に切り替えることで規制を逃れようとしたんだそうなの。

「焼き殺される方にしてみればガソリンだろうと灯油だろうと関係ないんじゃないのかなあ」

空母いぶきの山南艦長はモニターの中で燃え盛る木造船を見ながら小さく呟いた。

F-35Bが夜も寝ないで働いている間も護衛隊群はジン・ハークに向けて三十ノツ

トで突き進む。突き進んだのだが……

五百キロは遠い。余りにも遠い。五千隻近い軍船が集結しているという港に近付くのに九時間も掛かってしまった。

水平線の向こうが夕焼け空の様に赤く染まっている。何だかとても綺麗だなあ。

近付くにつれて灯油や木材、さらには人肉の燃える匂いが漂ってきた。

こいつは辛抱堪らんぞ。って言うか、五千隻の船団は全て燃えちまったようだ。

護衛隊群はジン・ハーク沖から五インチ砲で陸軍の兵が集結していると思われる辺りにありつたけの砲弾を撃ち込む。七隻の護衛艦が用意していた砲弾を全て撃ち尽くした所で作戦完了となった。

中央曆1639年3月30日　クワトイネ公国　西部国境から二十キロ東にあるギムの町

とつても良く晴れた空の下。OD色に塗られた重機がロウリアとの国境に沿って深い塹壕を延々と掘っていた。

所々には無理を言つて空自から借りて来たVADSが据え置かれ、積み上げられた土嚢で嚴重に護られている。

騎士団長のモイジはその様子をぼおろつと眺めていた。

「精が出ますな、日本のお方。ところでこれは如何なる物ですかな？」

「ああ、モイジさん。こんにちは。これは……二十ミリの対空機関砲ですね。ワイバーン？ でしたっけ？ あの空を飛んで来る奴を撃ち落とすために置いてあるんですよ。でも、射程が千二百メートルあるし威力も凄いですから敵の歩兵や騎兵なんかも蜂の巣…… って言うか、ミンチにできますね」

「そ、そうですか。それは頼もしいですな。当てにしておりますぞ」

「礼には及びません、仕事ですから」

若い自衛官がこれ以上は無いほどのドヤ顔を浮かべる。だが、元ネタを知らないモイジは曖昧な笑みを返す事しかできなかった。

中央歴1639年4月11日午後

騎士団長のモイジは小さくため息をついた。

「ロウリアからの返信はないのかな？」

モイジが魔力通信士の顔色を遠慮がちに伺う。若い男は振り返ることもなくぶつきらぼうに返した。

「こつらからの通信が届いていないはずはありません。ですが今のところは何の音沙汰もないですね」

「うう〜ん。交渉の余地なしか。いよいよ覚悟を決めんといかん」

「今は日本の方々の力を信じるしかなさそうですね」

中央歴1639年4月12日早朝

東の空が明るくなり見張りの兵士たちが眠い目を擦る。

「定時報告、ロウリアの気配は依然として全くありません。監視を継続します」

騎士団長のモイジは深いため息をつく。

「何故だ！ 何故奴らは現れんのだ？ こんなに一生懸命に準備したというのに！」

不機嫌そうにモイジが喚き散らす。

きつと泣いた赤鬼もこんな気分だったんだろうなあ。自衛官たちは遠くから冷めた目で見詰めていた。

中央歴1639年4月22日

クワトイネ公国 政治部会

散々大騒ぎした末に結局ロウリア軍はやって来なかった。

来なくて良かったね。で済めば話は早い。だが、世の中そうは甘くない。

警報が空振りに終わると誰かが責任を取らねばならないのだ。

会議は初っ端から重苦しい雰囲気に含まれていた。

「うう〜ん…… 軍務卿、ここは一つ泣いてはくれんか?」

卑屈な笑みを浮かべながら首相カナタは揉み手をした。

有無を言わさぬ雰囲気、軍務卿は抵抗する気が削がれてしまう。

いやいやいや、諦めたらそこで試合終了だぞ!

「ロウリアが攻めて来ないのならばこちらから攻め込んで如何でしょうか? 小国と

侮っていたクワ・トイネが事もあろうに攻め込んで来る。そんな事をロウリアが捨て置

けるでしょうか? 捨て置けますまい! 反語的表現!」

「どうどう餅付け、軍務卿。とは言え、ナイスアイディアかも知れんな」

「しよ、正気にございますか! 首相?」

「何もジン・ハークまで攻め込もうと申しておるわけではないぞ。ちよちよつと行って

ぱぱつと挑発してくるだけの簡単なお仕事だよ。敵のプライドを押し折れば良いんだ。

善は急げ。軍務卿、直ぐにやってくれ」

「御意！」

約五千のクワ・トイネ軍は国境線を越えてロウリア勢力圏を荒らして回る。だが、意外な事にロウリアからの大規模な反撃はなかった。

第2話 短気な人たち

第三文明圏 列強 パーパルディア王国

明かりがぼんやり灯った狭い部屋、光の精霊とやらの力がオレンジ色にガラス玉を光らせている。壁に映った影は二つ。膝を突き合わせるように近い距離で男たちは国家の趨勢に纏わる話で盛り上がっていた。

「ロウリアが戦う前に敗れてしまったそうだな。いったい何があったんだ？」

「それがさぱくり分からのです。大部隊と大艦隊を集結させていたら突然の大爆発で全部が燃えてしまったんだとか」

「いやいや、それは報告書に書いてあるけどさ。火事の原因は何なのかなって話だよ。パーパルディアで同じ様なことがあったら怖いだろ？」

「所詮は木造船ですしね。聞いた話ですけど木材をホウ酸で処理すれば難燃性が高まるそうですね」

「ううん、ともかくにも今回のロウリアの一件は荒唐無稽に過ぎる。取り敢えず陛下への報告書はその方向で行くしかないな」

「御意」

パーパルディア皇国第三外務局

「どうしても局長が無理だというのなら課長でも良いのだが？ 君のような下つ端じや話にならない。権限を持った者に目通りを願いたい」

日本国外務省特命全權大使の芹沢は語気を荒げた。

「もうちよつとだけ待って下さいな。番号札の順で手続きしていますので…… ただし、内容によつて順番が前後することもあります。ご理解とご協力をお願いします。とは言え、貴方たちの要求内容を見たところ…… 結構ハードルが高いですなあ……」

「ハードル？ 恐れ多くも陛下からお預かりした親書を受け取るだけのことだぞ。これを蔑ろにするのは日本国を…… 延いては陛下を蔑ろにしておるといふことだぞ！」

芹沢は腹の底から響くような大声で絶叫する。

パーパルディアの窓口係は耳がキーンとしたので思わず顔を顰めた。

「いやいや、順番だつて言ってるでしょうに…… しょうがないなあ、そんじやあお預かりだけはしますから。後でちゃんと責任者に渡しますんで今日の所はお引き取り下さいな」

男は桐の文箱をひよいと受け取ると足元に置こうと……

「ぶ、無礼者が！ 陛下が御自らお書きになった親書を足元に置くとは…… 許さん！」

芹沢は無造作に刀を抜くと袈裟懸けに斬り捨てた。吹き出す血飛沫を器用に避ける
と血振るいした刀の残り血を懐紙で拭く。

「う、うわあ〜！ 医者を、医者を呼べ！」

「警備員は？ 警備員は何をしているんだ！」

芹沢は従者を伴って悠然とその場を後にしようとする。しようとしたのだが……

「止まれ！ 止まらんと撃つぞ！」

廊下の向こうから警備員らしき男たちが小銃を構えて駆け寄ってきた。

二人の従者は大きめのスーツケースから折曲銃床の自動小銃を素早く取り出すと三点バーストで次々と撃ち倒す。

「沖田艦長、芹沢です。奴らが余りにも無礼だったので殺っちゃいました。プランBでお願います」

「了解、流れ弾に当たらんよう注意して下さい」

芹沢がスマホで報告を入れると直ぐに沖合に停泊している護衛隊群からの砲撃が始まる。

手筈の通りなら滑走路、ワイバーンの厩舎、竜騎士の宿舎が最優先のはずだ。続いて海軍の司令部、艦艇を片っ端から始末して行く。

同時にヘリコプター搭載護衛艦から発艦したF-35Bが通常爆弾を王宮や官庁街

に投下した。

大混乱に乗じて芹沢たちは武装へりによって回収される。

護衛隊群にありつたけの砲弾を遠慮なく撃ち込まれた皇都エストシラントは灰燼と帰した。

第三文明圏列強パーパルディア皇国から東方に二百十キロ フェン王国

九州から北西に五百キロほどの海上に勾玉を逆さにしたような島が海に浮かぶ。つて言うか本当に浮かんでいるわけではないんだけどれも。

大きさは南北に百五十キロ、東西が六十キロほど。だいたい四国くらいの面積だろうか。

人口は五百万とも七十万とも言われている。

つて、どっちやねん！ 土方艦長は思わず自分で自分に突っ込んだ。

「艦長、まもなく首都アマノキ沖に着きますよ。どうしますか？」

「アマノキ側の指示に従ってくれ。ただし座礁にだけは注意してくれよ」

「はいはい、仰せのままに致しますよ」

「しつつかし、国交も結ばないうちから護衛隊群を親善訪問させろとはなあ。剣王シハ

ンって奴はせつちかち過ぎるだろ。しかもボロ口船を用意するから攻撃してくれだなんてさ。砲弾だつて一発十万円以上はするんだぞ」

「信管とか装薬まで含めると二十万円くらいはしますよ。まあ、ちやちやつと撃つてばぱつと帰りましょうや」

そんな馬鹿な遣り取りをしている間にも空母打撃群はアマノキ沖合に停泊した。

「剣王、そろそろ我が国の廃船に対する日本の艦からの攻撃が始まりま…… 中止だと！ 何があつたんだ？」

「それがその、火急の要件が発生したとのことです。ただ……」

「ただ何だ？ 早く言え、早く！」

あんたが言葉を遮らなきゃとつくに言つてましたよ！ 騎士長マグレブはイラつとしたが強靱な精神力で持つて抑え込む。

「ただ、代わりに日本の軍船の力を嫌というほど見せて貰えるとの話です。誰か一人観戦武官をよこせと言つてきました」

「観戦武官？ 日本はどこかと戦をしておつたかのう？」

「先日、日本の友好国クワ・トイネがロウリアと戦になりかけたと聞き及んでおります。もしやそのことではござりますまいか」

「まあよい、誰か一人行つて参れ」

たまたま暇そうにしていた王宮騎士団の十士長アインに白羽の矢が当たってしまった。

アインを乗せたイーゼス艦はるなは日本海？　と言つて良いんだろうか？　とにもかくにも九州から北西の海を三十ノットでひた走る。

その時、ふしぎなことがおこつた。

「未確認飛行物体！　方位三一五、距離四十海里、高度千二百フィート、速度百九十ノット。真つ直ぐにこちらへ向かつて来ます。数は……　およそ二十」

「アインさん。いよいよ日本の力をお見せできますよ。目をかっぼじつて見てて下さいよ」

「いやいや、目をかっぼじつたら駄目でしょう。『刮目して見よ』で良いんじゃないですか？」

「そ、そうですね……」

穴があつたら埋めたいぞ。土方艦長は悔しそうに唇を噛みしめることしか出来なかつた。

ミサイルは勿体無いということでワイバーンはC I W Sを使って撃ち落とす。

二十もいたのでちよっと心配したが防御力は貧弱そのものだった。一発当たっただけで死んでしまうとは情けないなあ。拍子抜けしてしまったぞ。

とは言え、あの弾は一発八万円もするのだ。一騎に数十発は使ったので五千万円くらい使ってしまったかも知れんな。ああ勿体無い、勿体無い。航空戦力は極力、離陸する前に始末しなければならんぞ。それとワイバーン如きにタンクスステン弾は不要だ。普通の二十ミリ弾で十分だろう。土方艦長は心の中のメモ帳に書き込んだ。

パーパルディア皇国 皇国監査軍東洋艦隊

提督ポクトアールは甲板に出て南東の空をぼおくと見詰めて佇んでいた。

現在位置はフェン王国まで百キロくらいだろうか。

「竜騎士隊との通信が途絶しました」

「どゆこと?」

「さばりわかりません。分かってたら先に言ってますって」

「それを調べるのがお前の仕事だろうが!」

皇国監査軍東洋艦隊の二十二隻は風神の涙が発する風を帆に受けて南東へとひた走

る。

大海原を進むこと暫し。水平線の向こうに何かが見えてきた。

「この辺りに島はありません。おそらく艦船と思われませんが…… 凄く大きいです！」

「なんじゃこりゃ?! 馬鹿デカイな。あんなのフェン王国にあつたっけかな？」

敵は八隻？ だが、大きさと速さが異常だ。あんなのと戦つて勝てるのか？

こつちの数は三倍近いとは言え個艦の大きさが違い過ぎるぞ。あんな大きな船だ。きつと何百人も乗つてるに違いない。

「総員、戦闘配置に着け！ これは訓練では無い！ これは訓練では無い！」

副長の絶叫で提督ポクトールもようやく肝が座つてきた。これは腹を括るしかないぞ。

火矢の先つぽに巻いたボロ布を油に漬けると巨大なバリスタに装填する。

敵の矢を防ぐための矢盾が隙間無く並べられる。

切り込み隊は甲板に整列すると今か今かと接舷を待つ。

そんなことをしている間にも小島のような巨大船はどんどん近付いてくる。信じがたいことだが常識外のスピードが出ているようだ。もしかして三十ノットくらい出るんじゃないだろうか。

「ぶつかるぞお〜！ 避けるお〜！ 避けるお〜！」

誰かの叫び声が聞こえる。そうは言うが、こちらは二十二隻もの大艦隊なんだぞ。バラバラに動いたらぶつかってしまいうじやないか!

その直後、ポクトール提督の乗った戦列艦は護衛隊群と真正面から激突した。

「どうだ? まだ浮かんでいる奴はいるか?」

「一隻残らず全て沈んだ模様です」

「アインさん。如何でしたかな? 日本の力は?」

「先ほどと言ひ、今の艦隊と言ひ……アレはパーパルディアではありませんか? 日

本は彼の国と戦をしておるのでしようか?」

「いやいや、まだ戦というレベルではないでしょう。せいぜいが懲罰といった所でしうかね。まあ、向こうの出方次第でどうなるか分かりませんがせめても」

土方艦長は意地の悪そうな笑みを浮かべた。

日本国とパーパルディア皇国の初の海戦は日本側の圧勝で終わった。

パーパルディア艦隊にはただ一人として生存者はおらず、パーパルディア史上唯一の生存者のいない海戦となった。

フェン王国 首都アマノキ

話は数時間ほど遡る。

せつかく用意した廃船ハルツに傷の一つも付けることもなく逃げ去った日本国の護衛隊群。その体たらくを見た各国武官は呆れ果てていた。

「約束を破るだなんて最低だな、日本の連中は！」

「違約金とか請求した方が良いんじゃないやありませんか？」

「あの廃船はどうすんですか。すつごく邪魔なんですけど？」

日本がいなくなつた途端に罵詈雑言の応酬が始まる。

文明圏外国の武官たちは自分たちの理解を越えた巨大艦に呆れ返ると同時に、デカイだけの見掛け倒しじゃないかと考え始めていた。

あの国と関わつても益は無いな。振り回されるだけ損だぞ。

フェン王国軍際のゲスト枠で来たんだからフェンと友好関係なんだろう。

そうなるフェン王国とのつきあい方も考えた方が良いかも知れんぞ。臭い物には蓋をせよ。可愛い子には旅をさせよ。頭と尻尾はくれてやれ……

後にフェン軍祭の大脱走と言われたアクシデントの後、日本国の評価は大暴落するこ

とになった。

パーパルディア王国 工業都市デュロ

街の遙か上空に点みたいに小さな物が飛んで来た。その直後に滑走路、ワイバーンの厩舎、竜騎士の宿舎が大爆発する。

時を同じくして港湾に停泊した軍船から次々と火柱が上がった。

暫しの後、今度は工場地帯が火の海となった。とてもではないが消火などできそうもない。地獄の業火の様な炎は三日三晩に渡って燃え続ける。

だが、その原因はいつたい何なのか。それはどこの誰にもさぼくり分からなかった。

第3話 遠い国からやって来た人たち

中央歴1639年5月15日 丁100—8919 東京都千代田区霞が関2丁目

211

外務省は今日も目が回るほどの大忙しだった。

転移後、四ヶ月にも及ぶ懸命の努力の甲斐もなく、国交を開く事が出来た列強国は第二文明圏のムーだけなのだ。

壁に掛かった『目指せ！ 全列強との国交締結』のスローガンが虚しい。

本当ならいまごろパーパルディア皇国とも国交が開けていたはずだったのになあ。外務大臣の新見は窓の外をぼろりと眺めながら大きなため息をついた。

短気な馬鹿が暴走したお陰で今やパーパルディアは無政府状態になっちゃった。これじゃあ国交どころの話ではない。

だったら復興支援の名目で自衛隊を入れて傀儡政権でも作ったら良いんじゃないかなるか。そんな意見も出た。出たのだが……

自分たちで作った政権と国交を結ぶなんてインチキじゃね？ という物言いが付いて流れてしまったのだ。

そんなわけでパーパルディアに関しては政権樹立ガチャを回し続けるしかない。たまたま運良く日本と国交を結んでくれる政権が誕生する。そんな奇跡を夢見て反日的政権が誕生する度に叩き潰す。そんな不毛なりセマラが自衛隊に押し付けられたのだった。

新見は頭を振って嫌な考えを頭から追い払うと壁に貼つてある地図に目を見やる。

今やこの世界に残された列強は第一文明圏の神聖ミリシアル帝国とエモール王国、第二文明圏のムーとレイフォルの四ヶ国だけだ。

第三文明圏のパーパルディア皇国は残念な状態なんだからしようがない。

ムー經由で得た情報によれば世界最強は神聖ミリシアル帝国らしい。とは言え、自称世界二位のムーは全くもって大した事の無い残念国だった。そうなると世界最強もたかが知れているんだろうけれど。

いったいどういうわけなのかムーはやたらと積極的に仲介してくれている。お陰であつさり国交が開けそうな予感がしないでもない。もしかすると国交を仲介するとインセンティブでもあるのかも知れないなあ。

ちなみにムーは日本から西へ二万キロの彼方だ。先日、やっとこさつとこ国交が結べたアルタラスに空港を作ったとしてもムーの南東にあるマイカルまで一万六千キロく

らにはあるそうだな。これはボーイング787-9の航続距離の限界ギリギリに近い。ホンの些細なトラブルが命取りに成りかねない距離だ。

何とかして第二文明圏に利用出来る空港を確保しなければならん。そのためににもミリシアルとの国交樹立を急がねば。

一方、エモール王国は人口が百万しかない吹けば飛ぶような小国だ。にも関わらず死ぬほどプライドが高いんだそうだな。

面倒臭そうな奴らだなあ。こいつは放つて置いても良いかも知れん。ムー、ミリシアル、レイフォルと国交が結べれば放置プレイで良からう。

新見はエモール王国を心の中のシュレッダーに放り込んだ。

まずはミリシアルと国交。そして滑走路の使用権。マイカル辺りへの空路確保。そしてレイフォルと国交だ。

うん、これが良さそうだな。新見は受話器を持ち上げると短縮ボタンを押した。

神聖ミリシアル帝国の使節団に乗せた『天の浮舟35型』は九州まで四百海里の空を北東へと飛行していた。

速度は百七十ノットといったところだろうか。低空を飛んでいるのでジェット気流

の影響も特にならない。

「まもなく日本の防空識別圏に入ります。日本国はエスコートのために戦闘機を二機出したそうですよ。先ほど魔信で連絡して来ました」

「日本の領空は領土の外側十二海里しかないそうですね」

「やけに短いなあ。領空の概念が我々とは根本的に違うのかも知れんぞ。機会があれば詳しい話を聞いてみよう」

「それにしても遠かったですねえ。あと二時間が待ち遠しいですよ」

情報局員ライドルカは狭い座席の中で精一杯に手足を伸ばす。外交官フィアームもジタバタと体を動かした。実際問題、エコノミークラス症候群は油断できないのだ。

「本当に遠すぎですよ。何の因果でこんな地の果ての国と国交を結ばなきゃならんのですか？ 交易にも不便すぎるし軍事的にも利害が絡みそうもありませんけど？」

「さつき戦闘機が二機来るって言いましたっけ？ ワイバーンじゃないってことは飛行機ですよ。ムーが旧式の中古機でも売ったんでしょうか。どんな骨董品が飛んでくるのか楽しみで楽しみでしょうがないですよ」

外交官フィアームの脳内を複製で固定脚の帆布張り戦闘機が百ノットくらいで飛び回る。

情報局としても手に入った情報は細大漏らさず伝えていた。伝えていたのだが……

碌な情報が無かったんだからしょうがない。受け取った資料には人口が一億だとか異世界から転移して来たといった明らかなデマとしか思えない様な話しか書かれていなかったのだ。

そんなわけでフィアームは先入観なしで日本の事を受け入れようとしていた。

「フィアームさん。一切の先入観を捨てて下さいね。頭を空っぽにした方が純粹に楽しめますから」

「解つてますつてば。新鮮な気持ちで楽しみましょうね」

「それにしても日本の飛行機械ってどんなでしょうね。待ち遠しくてしょうがないですよ」

w k t kを抑えきれないといった顔の技官ベルノが話に割り込んで来た。

三人が揃って窓の外を見た瞬間…… 機体から左右に百メートルほど離れた所を灰色の物体が目にも止まらぬ速さですれ違う。その速さはまるで砲弾かと…… いや、砲弾よりも速そうだ。

一瞬遅れて何かが爆発する様な轟音と共に機体がブルブルつと震えた。

「な、なんじゃ？ 今のは」

「う、撃つてきたのか？ 対空砲でも撃つて来たんじゃないかな？」

三人は呆然と窓の外を眺める。だが、その飛行物体の正体については見当すらつかない

かった。

実はすれ違った物の正体はF-15だった。初見で舐められたくない空自がいろいろと無理をしてデモンストレーションを行ったのだ。

クリーン状態のF-15がマッハ0.8からマッハ2.3に加速しようとするとなら、アフターバーナーを使っても4分半ほど加速しなければならない。これを行うためには搭載燃料を半分以上も消費することになる。

まあ、アフターバーナーさえ切れれば残った燃料で千キロ以上飛べるので帰って来る分には問題ないんだけど。

それよりも大きな問題はミリシアルの航空機がF-15から見れば超低空を飛んでいたことだった。戦闘機がマッハ2とかを出すのは空気の薄い四万フィート辺りなのだ。

仕方がないのでF-15はミリシアル機の二十キロほど手前から降下してマッハ2を維持しつつ擦り抜けるという無茶をやったのだ。

勿論、こんな状態で長時間飛行することはできない。機体の表面温度が上がり過ぎると燃料が沸騰するし風防ガラスにも悪影響があるのだ。

F-15はアフターバーナーを切ると慌てて急上昇して行った。

とは言え、これで終わったら一発芸でしかない。ちゃんと後からF-35も二機飛んで来る。こいつらはマツハ1・2でスーパークルーズが出来るのだ。

F-35は見せつけるように『天の浮舟35型』の周りを行ったり来たり、行ったり来たりする。

「明らかにムーの飛行機械ではないな。どこからどう見てもプロペラが無いぞ。あれは！ 機体側面の開口部は空気取り入れ口じゃないのか？ ま、まさかムーは魔光呪発式空気圧縮放射エンジンを実用化して日本に提供しているというのか？」

技官ベルーノは呆れるのを通り越して感心していた。

「それにしても無茶苦茶な速さだなあ。天の浮舟と比べるのもおこがましいぞ。時速千キロ以上は出てそうだな」

「さつきからドン、ドンって音が聞こえるでしょう？ アレは音速を超えた時に発生するとされる衝撃波ですよ」

「奴らは超音速で飛行しているというのか？ こつちは時速三百キロで飛んでいるというのに。もしかして奴らは阿呆なんじゃないのかなあ」

「実はゆつくり飛ぶ事が出来ないのかも知れませんがねえ。だつたら着陸はどうするつもりなんだろう。降りられなかったら笑つちやいますね。ふう、くすくす」

武官アルパナが茶化すと技官ベルーノも腹を抱えて大笑いした。

外交官フィアームも人を小馬鹿にした様な薄ら笑いを浮かべて吐き捨てる。

「馬鹿な野蛮人どもだなあ。せつかくムーの好意で高性能なエンジンが手に入ったというのに文明圏外国には使いこなすことが出来んのだろう」

「だとすれば我々が技術協力してやることも可能でしょう。ミリシアルの優秀な技術とムーのエンジン。Win Winの関係を結べるかも知れません」

「糞みたいな任務だと思っていたが意外と楽しめそうだな。俺はワクワクしてきたぞ！」

外交官フィアームは五月蠅く飛び回るF-35に熱い視線を送った。

戦闘機に誘導された天の浮舟35型は九州の上空を通過して大きな空港に着陸した。

「日本は魔法を使わずにこんな大きな滑走路を作ったのか？ ムーの支援があつたとは言え、凄まじい規模だな。って言うか、ムーにすらこんな大きな滑走路はないはずだぞ」

「先ほどの超音速機を着陸させるためではないでしょうか？ ゆっくり飛ばないから長い滑走路が必要になるんでしょうね」

これ以上はないといったドヤ顔を浮かべた技官ベルノが勝ち誇った様に宣言する。だが、そのドヤ顔が一瞬にして変顔に変わった。

F—35は急激に速度と高度を落とすと滑走路の端っことで空中停止してしまふ。実は空自に做つて海自もミリシアルに良い所を見せようとF—35Bを用意していたのだ。

「な、なんじゃありや〜!」

外交官フィアームはあらんかぎりの大声で絶叫する。

耳がキーンとなった情報局員ライドルカは顔を顰めた。

天の浮舟35型は誘導に従つてハンガーへと格納される。

想像を絶するほど巨大な建物の中には後退翼に空気圧縮放射エンジンをぶら下げた飛行機械が何機も並んでいる。

そのどれもが天の浮舟35型の二倍、三倍ある様な大型機だ。

使節団が機を降りると日本国が出迎えに来てくれた。

「遠い所をようこそお出で下さいました。外務省第一文明局参事官の永倉です。どうぞよろしく。よくもまあ、こんな小さな飛行機で一万キロも飛んで来られましたな。さぞやお疲れでしょう」

「外交担当のフィアームです。こちらこそよろしく。しつかし日本の飛行機械は随分と大きいですな。我が国にもこれほど大きな飛行機械はありませんよ」

外交官フィアームは素直な感想を口にした。つまらん嘘を付いてもすぐバレるに決まっている。だったら先に手札を晒した方が気が楽だ。

だが、永倉参事官は凶星を突かれたといった風に大げさに驚いた振りをして見せた。「いやいや。航空機、大きいのが故に貴からずですよ。実を言えば国際線が飛ばなくなつたお陰で大型機の需要が激減しているんです。そんなわけでリージョンナルジェットですか？ ああいう小さい航空機に注目が集まっていますね。ですが、ミリシアルさんが我々の航空機を受け入れていただけるのでしたらムーへの空路も開けます。皆様方には日本の優秀な航空産業をご覧いただき、日本の航空機がいかに安全で快適かをご理解賜りたいと思っております」

「そ、そうですね。それは良かったですね……」
ぐいぐいと詰め寄ってくる永倉の勢いにフィアームは気圧されて若干引いてしまった。

一行は休む間もなく空自の多用途支援機U-4に乗せられるとその足で種子島へ飛ぶ。

たまたま偶然にも情報通信衛星の打ち上げ予定があつたのだ。

SRBを四本取り付けたH-IIBロケットが凄まじい炎と轟音を立てて飛んで行

く。

「永倉さん。アレは一体どこへ飛んで行ったんですか。いったいどうやって降りて来るとでしょう?」

「いやいや、アレはどこにも降りては来ませんよ。上がったつきりです。まあ、寿命が切れて何十年もすれば落ちてくるかも知れませんが」

「そ、そうですか……」

そんな物を飛ばして何が嬉しいんだろう。外交担当のフィアームは口まで出かかった疑問を飲み込む。

技官のブルーノだけはその意味に気が付いた。だが、空気を読んで何も言わなかった。

第4話 食べる!鹿煎餅を

福岡にとんぼ返りした神聖ミリシアル帝国使節団は今度はエアバスA320に乗せられると慌ただしく飛び立った。

「先ほどより随分と大きい飛行機械ですな。次はどこへ連れて行ってもらえるんでしょう?」

技官ベルーノは永倉参事官に話しかけた。

だが、永倉は答えをさり気なくはぐらかすことにする。なぜならこういうのはサプライズ感が大事なのだ。だってどこに行くのか分かっていたら驚いてもらえないんだもん。

「これは旅客機としては中ぐらいと言ったところですかね。つて言うか、たいていのLCCは機体をB737かA320に統一してるんですよ」

「そ、そうなんですか。では帰りはB737に乗れたら良いですね。ところで随分と高く飛ぶんですね。いったいどれくらいの高さを飛んでいるんでしょう?」

「ううーん? 見た感じ、二万数千フィートくらいじゃないですかね? 路線や天気次第で臨機応変なんですよ。東京・大阪くらいの短距離だと偏西風にもよるけれど二万四

千フィートから三万フィートくらいを飛びますね。だけでも近距離だと上昇で使う燃料が燃費向上と比べて割に合わないでしょう？ だったら国際線ならばもつと高く飛ぶと思いますか？ とところがぎつちよん！ 長距離飛行だと燃料を山ほど積んでるですよ。だから始めは低く飛ぶんですね。例えばアメリカ西海岸に行く旅客機は始めは三万一千フィートくらいを巡航。三万三千、三万五千と上昇して西海岸手前では三万九千くらいまで上がるんですよ。と思いきや、二時間とか三時間くらいのフライトだと最初から軽いんでいきなり三万七千とか三万九千まで上昇して一気に目的地まで言っちゃう事が多いんですね。ちなみに旅客機だつて荷物が空で燃料が少ない状態ならば五万フィートくらいまで上がれるんですよ」

「……」

永倉の旅客機の飛行高度に対する熱い思いが伝わったんだろうか。ミリシアル使節団はドン引きの顔で黙り込んでしまった。

と思いきや、技官ベルーノが急に口を開く。

「そう言えば、日本には時速三百キロの高速鉄道があるそうですね。ムーの技術者がやたらと褒めちぎっていましたよ。それには乗せて頂けないのでしょうか？」

「ああ、新幹線のことですね。アレは駄目ですね。駄目駄目です。だつて福岡・東京は九百キロも離れているんですよ。新幹線に乗ったら五時間くらい掛かっちゃいます。そ

れが飛行機なら九十分で行けるんですよ。東京・大阪ならともかく福岡・東京なら飛行機の一択ですね。まあ、急に出張が決まったりしてチケットが取れない時は仕方無いですけれど」

「そ、そうなんですか」

今回の永倉は飛行機の営業が主な任務だ。鉄オタを敵に回さないギリギリの線で新幹線をデイスる。

そんな説明で納得してくれたんだろうか。ミリシアルの連中は今度こそ本当に黙り込んでしまった。

羽田に到着した一行はその足でJALスカイミュージアムを訪問する。ここは完全予約制なのだが大人気の施設なので普通は半年先まで予約が埋まっているそうなの。

だが、見学日の一週間ほど前に送られて来る確認メールのタイピングでキャンセルする人もいるらしい。根気よくチェックしていれば運良く予約が拾えることもあるのだ。

まあ、今回はミリシアルの発着枠確保という重大ミッションが掛かっているのでJALさんに無理を言いつて割り込ませていただいたんだだけども。

ちなみに見学自体は無料だ。これで予約さえ取り易ければ言うことないんだけどなあ。永倉は心の中で小さくぼやく。

受付で首から下げる入館カードを貰う。ストラップの色は全部で十三色がランダムに配られるそうだ。

「フィアームさんは赤がもらえたんですね。いいなあ、私も赤がほしかったなあ」
「それじゃあ私のと交換してあげますよ。ブルーノさん」

ライドルカと換えっこしてもらったブルーノは大満足といった顔だ。

QRコードをエントランスゲートにかざしてエレベーターで三階へ上がる。目の前に展示エリアが現れた。みんなの興奮が最高潮に高まって来る。

はやる気持ちを抑えて教室へ移動。荷物を席へ置いたら展示エリアの奥にあるお土産物コーナーへダツシユだ。まあ、走つてはいけないんだけれど。とにもかくにも航空教室までの三十分がお土産タイムなのだ。一同はここでしか買えないお土産を買い込んだ。

次に向かったのは衣装体験コーナーだ。ここでは機長やCAの制服を着て旅客機の写真パネルの前で記念写真を撮ることが出来る。

他にも各種旅客機の座席、マーシャラー体験コーナー、歴代CA制服、VR体験コーナー、B-787のコクピット、エトセトラエトセトラ…… ミリシアルの面々は大興奮の様子だ。

やがて三十分の航空教室が始まる。ここでは羽田空港や機体に関する説明を受けた。

トイレ休憩の後にいよいよ待ちに待った格納庫の見学だ。一同は案内係の人の後ろに金魚の糞みたいにくつついてM1へと移動する。

高い所から見下ろす飛行機械は下から見上げるのとは違った風情が感じられた。

成田空港の格納庫は呆れるほど巨大だ。飛行機械が大きいのだから広さが必要なのは理解が出来る。だが、高さはここまで必要なのだろうか。天井までどれくらいあるのか見当も付かない。

飛行機械の周辺には不思議な形をした専用車両や背の高い足場が立ち並んでいる。

「点検は随時行っておりますが、ここでは十八ヶ月ごとに行う十日ほどの整備。それと七年に一度の重整備を行っています。その際は客室内のあらゆる物の撤去はもちろん、塗装まで剥がして機体構造を徹底的に点検するんですよ。一月くらいは掛かりますね。その際にはエンジンもパーツ単位に分解。洗浄、検査、修理、再組み立てしたうえで試運転を行います」

「ほ、ほほおう。随分と安全性に気を配られておられるのですねえ」

ゾロゾロとM2へ移動する。一同は貸し出されたJALの赤いヘルメットを被った格納庫の隅っこにはナセルを外した空気圧縮放射エンジンが置いてある。直径が人の背丈よりも大きなエンジンだ。

「この直径二メートルもある大きなファンブレードは一分に二千六百回転もしていま

す。ところが外側との隙間は五ミリしか無いんですよ。チタン製で一枚が一千万円もする物が二十二枚なのでこれだけで二億二千万円ですね。他にも高価な部品が山ほど使われておりますのでこのエンジン一基で八億円くらいでしょうか」

「エ、エンジンってお高いんですね」

「エンジン内部にある圧縮ファンは毎分一万一千三百回転もしています。その遠心力は凄まじいんですよ。だから万が一にもタービンブレードが飛散すると大惨事になりかねません。まあ、外側をケブラー繊維で覆ってはいらるんですけどね。車や電車が故障しても止まるだけですけれど飛行機が故障したら落ちちゃうでしょう？ とにもかくにも我が国は航空機の安全性に細心の注意を払っているんですよ」

「そ、そうですか。それを聞いて安心しました」

そんな話を話している間にも目の前のC滑走路では数分おきに飛行機械が離発着を繰り返し返していた。

見学を終えた一同は一本道を歩いて行く。なぜならばJALの工場見学では駐車場は使えないのだ。

羽田空港の有料駐車場も土日祝や夏休み・春休には満車気味なので諦めて歩いた方が早い。って、いったいどこへ向かっているんだろう？

「永倉さん。我々はどこへ向かっているのでしょうか?」

「ああ、お次はANAの工場見学ですね。本当はANAの工場見学は平日のみなんですよ。だけでも土日には対象。パッケージ商品を予約・購入した人限定の見学会をやっているんです。今回はそいつに政府権限で無理やりねじ込みました」

「そ、そうですか。しかし工場見学ならさつき行っただばかりではないですか?」

「いやいやいや、JALとANAは全然違いますよ。たとえば……たとえばJALのエンジンはGE製でしょう? だけでもANAのエンジンはロールスロイス製なんですよ。知ってました?」

「い、いや。存じませんでしたな」

十分ほど歩くとANAのメンテナンスセンターに到着する。入口の大きなモニターに参加者の名前が表示されていた。受付で予約確認書を見せるように言われる。

「え、ええ〜っ。アレって印刷して来なきゃいけないかったですか。申し訳ない。忘れちゃいました。てへぺろ」

照れ隠しに薄ら笑いを浮かべた永倉が平謝りした。

入館カードをもらうと開場まで時間を潰す。JALと違ってそれほど展示物は無い。巨大な模型が並んでいるくらいだ。一同は館内のセブンイレブンでANAグッズを山ほど購入した。

部屋に入って航空教室を受ける。お土産のストラップが配られた。機内誌もご自由にお持ち下さいとの事なので遠慮なくいただく。

ようやく待ちに待った整備工場だ。扉を開けて進むと……高い！完全に飛行機を取り囲む様に組まれた足場が現れた。高さは五階建てくらいはありそう。こんなに間近で飛行機械が見下ろせるとは思わなかったぞ。興味津々の技官ベルーノは細部まで舐め回すように観察した。

続いてJAL安全啓発センターを訪れる。ここは御巢鷹山に墜落した123便の教訓を風化させてはならないという思いと、安全運航の重要性を再確認する場だ。

一同は後部圧力隔壁や後部胴体などの残存機体、コックピット・ボイスレコーダー、ご遺品、乗客の方々が残されたご遺書、事故の新聞報道や現場写真の展示パネルを見学した。

事故の状況をまとめた映像資料も視聴する。

「ううくん。飛行機械、大きいが故に尊からずとは良く言った物だな。大きいが故に一度落ちれば五百名を越える犠牲者を出す事もあるのだ。我がミリシアルも学ぶ所が多いな」

「御意！」

こんな超高度な事を簡単に真似出来るとは思えんのだけれども。技官ブルーノは取り敢えず返事だけは威勢よくしておいた。

国土交通省 航空局 安全部 航空機安全課 航空機技術基準企画室
室長の斎藤は神聖ミリシアル帝国使節団に対して日本の航空機の安全性を説明していた。

流れているのは航空機の安全性に関する映像資料の数々。その内容は航空会社の研修で使われる物だ。

日本の航空機がいかに安全化なのかを骨の髄まで教え込んでやらねばならない。そのためには高度な専門知識まで叩き込む必要がある。説明は徹底的なスパルタ式で行われた。

三日三晩に渡った説明がようやく終わりを告げた。使節団たちの顔には揃いも揃って引き攣った笑顔が張り付き、とつても虚ろな目をしている。

「お疲れさまでした、神聖ミリシアル帝国使節団の皆さま。いかがでしたでしょうか？日本の航空機の安全性に付いてご理解いただけましたでしょうか？」

「さ、さあ。私はもう何が何だかわけが分からなくなってきましたよ……」

卑屈な笑顔を浮かべた外交官フィアームが小さくため息を付く。

「そうですか。残念ながら補習が必要みたいですね。それではこちらの教材を……」

「ま、待つて下さい。もう十分です。日本の飛行機械の安全性に関しては十分に分かりましたから。お願いですから飛行機械とは違った話をさせてはもらえませんか？」

「そうですか。確かに少しばかり詰め込みすぎたかも知れませんが。ちよつと息抜きに航空機以外の話でもしましょうか。そうだ、日本には回転翼機というのがありましてね。これの安全性に関する話でも……」

「うわあ~~~~っ!」

とうとう外交官フィアームが喚き出す。情報局員ライドルカと武官アルパナは冷たい目でそれを眺めていた。

流石にこのままでは不味いと思ったのだろうか。外務省の永倉参事官が戻つて来てくれた。

「いやいや、申し訳ありませんでした。航空局との調整が上手く行っていかなかったよう
で随分と失礼したようですね。航空安全の説明に関してはスケジュールを全面的に見
直しております」

「そ、そうですか。それを聞いて安心致しました。ところで永倉参事官に個人的なプレ

ゼントをお渡しして宜しいですか? これは我が国で作られた魔導計算機械です。これさえあれば掛け算や割り算の答えを瞬時に導き出す事が出来ますよ。ほら! 便利でしょう?」

ドヤ顔を浮かべた外交官フィアームは紙袋から巨大な物体を取り出した。

「これはこれはご丁寧に。よっこいしよいち。意外と重量感がありますね。漬物石の代わりに使えそうですよ」

「重さは十四キロです。計算機械、重きが故に尊からずですよ」

「そ、そうですね。シャープが作った世界初のオールトランジスタ電卓なんて重さ二十五キロもあつたんですよ。見てくださいな」

永倉はスマホにシャープPCS-10Aの画像を表示させる。

「幅が四十二センチ、奥行が四十四センチ、厚さ二十五センチって書いてありますから大きさはこっちの方がちよつと大きいですね」

「……」

「当時の価格は五十三万五千円だったんですよ。こういう物は一割引きくらいで販売しますから総務部長決裁で買える価格だったらしいですね」

「……」

外交官フィアームは不服そうな顔だ。これはプライドを傷付けちゃったかも知れん。

永倉は咄嗟に頭をフル回転させる。

「そ、そうだフィアームさん。見て下さいな、これを。我々の世界で最初の電子計算機E N I A C っていうんですけど高さ二メートル五十センチ、幅二十四メートル、重さはなんと二十八トンですよ？」

「……」

「だったらこっちはどうですか？ 日本最高速のスーパーコンピューター富岳！ 京の跡地に設置するそうですから六十メートル×五十メートルくらいあるはずですよ。ね？ ね？ ね？」

「……」

もしかして大きい勝負は失敗だったのか？ 永倉は頭を抱えなくなった。

お返しにと永倉がプレゼントしたのはハローキティのキャラクター電卓だった。テンキーがキティちゃんの形、外側のキーはハート形をしている。その外見の可愛らしさにフィアームも大喜びしているみたいだ。

永倉はほっと安堵の胸を撫で下ろした。

フィアームは帝国の高度な技術力を見せびらかせば日本が悔しがるかという微妙

な望みを持っていた。

だが、その目論見は儂くも潰える。ただの計算機械をこんなにも可愛らしく飾り立ててしまうとは。日本、恐ろしい国! 何だか自分の持参した無骨な計算機械が恥ずかしくてしようがないぞ。

そうだ! 本国に帰ったらミリシアル製の計算機械も可愛らしいデザインにするよ
う提案しよう。フィアームは心の中のメモ帳に書き込んだ。

翌日から使節団は日本中を観光旅行というか物見遊山というか…… 視察して回った。

首都圏外郭放水路、東京湾アクアライン、野辺山の四十五メートル電波望遠鏡、三
万トンのタンカー、奈良の大仏、エトセトラエトセトラ……

これでもかとはばかりの大きいもの尽くしだ。

「フィアームさん、その煎餅は食べちゃ駄目です! いやいや、別に毒ではないんですけ
どね。鹿にやる奴ですから」

「確かにあんまり美味しくありませんね。つて言うか不味いですよ。これつて何で出来て
るんですか?」

「米糠と小麦粉らしいですね。そうそう、あつちで人間専用の鹿煎餅を売っていますよ。

お土産にするんならそつちをどうぞ」

人間専用の鹿煎餅？ わけが分からないよ……

好奇心の塊のようなフィアームはお土産屋に走って行った。

第5話 滅ぼせ!レイフォルを

中央歴1639年6月15日

外務大臣の新見は神聖ミリシアル帝国を訪れ国交を開いた。

同時にカルトアルパスやルーンポリスへの航空便の相互乗り入れが決定する。

日本企業も参加した空港拡張事業が始まった。

滑走路の補強や延長、付帯施設の建設は三交代の突貫工事の末、僅か一月で完成する。並行してムーのマイカルやオタハイト空港の拡張も完了した。

中央歴1639年8月1日

ムーの北側を大回りして護衛隊群が南西方向へと進んで行く。

日本国外務省特命全権大使の芹沢はヘリコプター搭載護衛艦いぶきのCICでモニターを見詰めていた。

高度四万フィートを飛ぶF-35Bの捉えた映像が大写しになる。オペレーターは手慣れた物といった手付きでマップ上に滑走路や厩舎、宿舎をマーキングして行く。

芹沢は軽く鼻を鳴らすと吐き捨てるように呟いた。

「山南艦長、個艦の能力はパーパルディアと同レベルのようですね。数もせいぜい四十隻といったところででしょうか。パーパルディアどころか下手したらロウリアよりもチヨロそうですよ」

「ひよつとしたら本艦一隻の即応弾だけでも余裕で片付けられるかも知れません。とは言え、芹沢さん。今回は穏便に頼みますよ。せっかく三週間も掛けてやって来たんですから。二万キロも離れた所で戦争するって補給が大変なんですからね」

「分かっています。私だって無益な殺生は避けたいんですから。だけでもパーパルディアのアレは陛下の親書を粗末に扱われたからなんです。捨て置けんでしょう？
そもそも補給なんて一撃で倒せば関係ないんじゃないですか？」

「……まあ、好きにやってみなさいな。私は私の仕事をするまでですから」

偵察機と入れ替わる様に六機のF-35Bが発艦する。編隊を組むとレイフォリア王宮の上空を超音速で掠める様に飛んだ。

ムーヤミリシアルから聞いた話ではレイフォールは弱小な原始人の癖にプライドだけは高いんだそう。

だから取り敢えずは目一杯の威嚇を行うのだ。それでもプライドが折れない様なら滅ぼす許可も得ている。

「では、行って参ります」

「お氣をつけて。吉報を待っていますよ」

山南艦長に見送られてC I Cを出た芹沢は第一格納庫へ直行する。ムーの大使ユウヒヤミリシアル外交官フィアームがキリンみたいに首を長くして待っていた。そう言えばミヤンマーのカレン族とかも首が長いんだっけかなあ。

「ああ、お待たせして済みません。んじゃあ、とつとと参りましょうか」

「まさかこれに乗ることになるとは思いも寄りませんでしたよ」

「何だか妙な形の飛行機械ですねえ。ちゃんと飛ぶんでしょうか?」

「大丈夫ですつて。ユウヒさん、フィアームさん。自分を私を信じないで下さい。二人を信じる私を信じて下さいな。それに『今日は死ぬには良い日』ですよ」

オスプレイはエレベーターで飛行甲板まで運び上げられると轟音を立てて発艦した。

心配していたレイフォルからの攻撃は無かった。お陰で陸自に頭を下げたまで出してもらった二機のAH-64Dも手持ち無沙汰の様子だ。

もういつそ、こつちから戦争を仕掛けてやろうかなあ。芹沢はレイフォルを叩き潰したくてしょうがない。だが、ムーとミリシアルが目の前にいるので空気を読んで何とか我慢した。

レイフォル王宮では玉座にふんぞり返ったレイフォル皇帝（名前はまだ無い）が將軍バルから報告を受けていた。

「先ほど王宮上空を飛んでいた物とは別の鉄竜が庭園に降りて参りました。畏れ多くも皇帝陛下への目通りを願いでております」

「そもそも、あれはいつたいたいどこの鉄竜なのじゃ？ 儂はあのような鉄竜は目にしたことも無いぞ。ムーではないようじゃが」

「それが日本とか申す聞いた事も無い国でございます」

「は、はあ？ その様な名前も知らぬ国が儂に目通りしたいじゃと？ それをいちいち儂の耳に入れるとは…… こんのお、フリムンがあく！ ぬくあびとくが？」

突如として名もない皇帝が怒髪天を突く勢いで怒り出す。

自分は名前があつて良かったなあ。將軍バルはほつと安堵の胸を撫で下ろす。

その時、ふしぎなことがおこつた！ 息を切らせた若い男が玉座の間に駆け込んできたのだ。

「ムーの大使ユウヒ殿とミリシアル外交官フィアーム殿が目通りを願ひ出ております。どうやら日本とか申す国の鉄竜に同行しておつたようにございます」

「う、ううん? ムーとミリシアルじゃと? そうか、日本とやらは列強の虎の威を借りるつもりなのじゃな。小癩な奴じゃがムーとミリシアルの顔を立てんわけにも行かんか。目通りを許す。通せ」

「御意!」

待つこと暫し。外交官らしき三人の男が従者たちを連れて現れた。

妙な衣装を着た中年男が何の恐れ気もなくつかつかと面前まで歩み寄つて来る。人を小馬鹿にした様な薄ら笑いを浮かべると一方的に喋り始めた。

「いやいやいや、皇帝陛下? でしたっけ? アポなしで突然にお邪魔してすいませんねえ。日本国特命全権大使の芹沢と申します。どうぞよろしく。今日は畏れ多くも畏くも、我が国の陛下が御自ら認められた親書をお届けに参上しました。日本の文字で書いてあるので残念ながら皇帝陛下にはお読みになれませんね。失礼ですが代読させて頂いて宜しいですか?」

発言を許した覚えは無いんですけど? 名無しの皇帝はちよつとイラつとしたが空気を読んで我慢する。

日本国特命全権大使とやらは返事を待つ気すらないらしい。素早く文箱から巻物みたいな紙を取り出すと眼前に掲げる様にして読み始めた。

「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。つつがなきや。」

中略

兵を用うるに至りては、夫れ孰か好むところならん。王それこれを圖れ。不宣」

何だか意味は良く分からんけど馬鹿にされてる様な気がしないでもないなあ。でも、今のはどういう意味だったんですか何て聞いたら馬鹿だと思われそうだし。名無し皇帝は精一杯のはつたりを利かせようと余裕の笑みを浮かべる。

一方でドヤ顔を浮かべた芹沢は巻物を箱に仕舞うと恭しげに差し出した。

受け取れと？ これを受け取れというのか？ 名無し皇帝は暫しの間、逡巡する。逡巡したのだが…… 迷っているうちに將軍バルが現れて恭しげに受け取ってしまった。

芹沢はちよつとイラつと来たが強靱な精神力で持つて何とか抑え込む。せつかくレイフォルを滅ぼすチャンスだったのになあ。まあ、チャンスはまだまだあるだろう。

「さて、皇帝陛下。さっきの手紙の返事をいただけますでしょうか？ 手紙には軍事力を使いたくはないなどと書いてありましたが、本音を言えば兵たちは皆やる気まんまんでして。お望みとあらば貴国の艦隊などあつと言う間に片付けてみせますよ。何せ我が国はパーパルディアを滅ぼした実績がございます。ですよねえ？ ユウヒさん、フィアームさん」

「そうです、皇帝陛下。日本国はパーパルディア皇国をあつげなく葬りました。彼らが本気になれば…… っていうか、本気を出さずともレイフォルくらいなら片手間で瞬殺

でしょう。ムーとミリシアルが保証いたします。既に両国は日本を列強国待遇として国交を結んでおります。来年の先進十一ヶ国会議においてはパーパルディアに代わって正式に列強国入りする事でしょう」

「悪い事は申しません。日本国と友好関係を結ぶ事をお勧めいたします」
「戦うなら止めはしませんが絶対にレイフォルの負けですよ。何だつたら賭けましょうか?」

半笑いを浮かべたユウヒとフィアームが茶化す様に囃し立てる。その顔には真剣さの欠片もない。

もしかして二人は既にレイフォルの滅亡を確信しているのかも知れんな。芹沢も何か言つてやろうと頭を撚る。しかしなにもおもいつかなかつた!

「まあ、断つていただいても結構ですけどね。外交を結ぶ事務手続きよりも滅ぼした方がよっぽど早そうですね。ちなみに日本に領土的野心はありません。つて言うか、こんな僻地を統治するのは面倒臭いだけです。ぶっちゃけ列強国さえ滅ぶてくれれば後はどうでも良いんですよ。もしレイフォルを滅ぼした場合はムーさんに統治をお願いしますね」

唐突に話を振られた大使ユウヒが目を白黒させている。

だが、皇帝はそれどころではなさそうだ。あからさまに狼狽えた顔でキョロキョロと

落ち着かない。

見かねた將軍バルが口を挟んできた。

「いや、あの、その…… 皇帝陛下、お願いしますよ〜！」

「えっ？ 農？ 農はそのアレだな、アレ…… ええ〜つと、何だ？ 閃いた！ ムーやミリシアルの話を疑うわけではないが日本の力？ 兵の強さ？ 何って言うかそんなのをちよこつとで良いから見せてはもらえんもんじゃろうかのう？ 我が国としても列強としての体裁がある故、日本が強いという証拠を見せてもらわねば軍や兵が納得してくれんのじゃよ」

「デモンストレーションがお望みですか？ そうですねえ、ミサイルは勿体無いですけど砲弾の十発やそこらならお見せできないこともないですよ。的はご用意いただけますか？ すぐやりましょう」

なし崩し的に始まったデモンストレーションはレイフォル軍人たちのプライドを僅か数分でズタズタに引き裂いてしまう。

この日、列強国レイフォルは国交とは名ばかりの屈辱的な条約を結ばされた。

第6話 滅ぼせ!パガンダを

中央歴1639年8月10日

呆気ないほど簡単にレイフォルとの国交を成功させた芹沢の心をどす黒い物が満たしていた。

せっかく滅ぼす気で満々だったのになあ。あんな無条件降伏同然の屈辱的な条件で国交を結ぶだなんてどうかしているぞ。俺だったら絶対に戦争を選ぶのに。まあ、完全に他人事なんだけれども。

「芹沢さん。パガンダが見えてきましたよ。今度は上手く行ったら良いですねえ」

「まあ、あのレイフォルの属国ですから期待はせんでおきましょう」

「そうですねえ。レイフォルが中世の小国だとしたらパガンダは未開人の小国ってところでもん。五インチ砲を使う必要すら感じませんよ。C I W Sだけで片付くんじやないですか」

「さて、せいぜい気張って挑発するとしましようか」

ぞつとするほど邪悪な笑みを浮かべると芹沢はC I Cを後にした。

例に寄って例の如くF—35Bで露骨な示威飛行を繰り返す。念には念を入れて二機のAH—64Dを護衛に付けてオスプレイでパガンダ王宮に乗り付けた。

機体後部の搭乗用ランプのドアを開けて下りる。遠巻きにこちらの様子を伺っていた。パガンダの人たちが近付いて来た。

「おお、日本のお方々。お待ち申し上げておりましたぞ。遠い所をようこそお出で下さいました」

「は、はあ？ 待つていたですと？」

「レイフォルから魔信で連絡がございました。日本の方々が参られるのでくれぐれも粗相の無い様にせよと申し付かっております。芹沢様でいらつしやいますね。申し遅れました。私はパガンダ外交局のドグラス外交長でございます。一応は王族をやっておりますので何かお役に立てる事がございましたら何なりとお申し付け下さりませ。こちらは外交局窓口職員のマーサでございます。身の回りのお世話をさせていただきます。ささ、どうぞこちらへ。歓迎の支度が整っておりますぞ……」

つまらんなあ。いやいや、こういう相手をとことん挑発しまくるのもそれはそれで面白いかも知れん。芹沢の灰色の脳細胞が邪な考えでフル回転を始めた。

パガンダ王宮で行われた宴会は気合の入った本気の歓迎だった。人は命の危険が迫

るところここまで卑屈になれる物なんだろうか。パガンダ国王が裸踊りを始めるに至って、芹沢は滑稽を通り越して哀みすら感じてしまう。

こんな奴らを滅ぼしても寝覚めが悪いだけかも知れんなあ。よし、もうちよつと育てて倒し甲斐があるくらいになってからにしよう。芹沢はパガンダ殲滅の無期延期を心の中のメモ帳に……

その時、ふしぎなことがおこった。じゃなかった。その時、歴史が動いた!

「芹沢さん。山南艦長から連絡です。西方から大型船が一隻接近中とのことです。距離三十海里、速度三十ノット」

「あと一時間で着きますね。なぜ今まで気付かなかったんですか?」

「野蛮人の国だからって油断してへりを上げていなかっただけです。映像を見ますか」

「こ、これは…… 大和? なんだか知らんけど戦艦大和にくりそつ(死語)なんですけど……」

「これはグラ・バルカスの軍船ではござりますまいか。奴ら先日の仕返しに参ったのじゃな! 返り討ちにしてくれるぞ。皆のもの、戦支度を致せ! 合戦じゃ、出会え出会え!」

裸踊りを中断したパガンダ王が真顔に戻るとテキパキと的確な指示を出している。

馬鹿殿みたいな外見とは裏腹にこの男、意外と指導者としては有能なのかも分からんな。芹沢はパガンダ王の事をちよつとだけ見直しそうに……

「いやいや、あかんやろう！　こんな原始人があんな巨大戦艦を相手にして勝てるはずが無いだろがあ〜！　芹沢は頭を抱え込みたくなる。と思つたけど、冷静に考えたら別にパガンダが滅ぼうがどうしようが知つたこつちやないか。でも、せつかくこんな遠くにまで来たんだしなあ。特に理由は無いんだけれど弱い奴の味方をしたいような、したくないような。いわゆる判官贔屓つて奴だ。」

話を聞けば奴らは遙か西方からやつて来たグラ・バルカス帝国とかいう文明圏外の蛮族らしい。先日やつて来た連中があまりにも無礼なので責任者を処刑したんだそう。どうやらそれを逆恨みして復讐戦を仕掛けて来たらしいとのことだ。

これは面白くなって来たぞ。芹沢は大急ぎでヘリコプター搭載護衛艦いぶきへ戻つた。

「山南艦長、パガンダ虐めはキャンセルになりました。代わりにあの戦艦と戦いましょう！」

「え、ええ〜っ！　せつかく用意してたのに……　つて言うか、あの戦艦と戦うですと?!　どこの誰かも分からんのにですか?」

唐突な無茶振りに艦長の顔が不満げに歪んだ。だが、芹沢は他者への共感能力に欠陥でも抱えているのだろうか。全く悪びれる事もなく話を続ける。

「いやいや、西にあるグラ・バルカスとかいう国らしいですよ。そう言えば偵察衛星からの情報でそれっぽい国がムーの西にあるって情報がありましたっけ。テクノロジーやポリウム感は第二次大戦末期のアメリカくらいみたいですわね」

「そ、そうですね。しかし、国交も無い国といきなり交戦するわけにも行かんでしょうに。まずは切っ掛け? 大義名分? 何かしら理由が必要じゃないですか?」

「だけど向こうはやる気満々なんですよ。我々がパガンダとの間に入れば勝手に向こうから仕掛けてくれますって。後は正当防衛射撃するだけの簡単なお仕事ですから」

「う、ううくん。しょうがないですなあ。まあ、あんなだけの熱烈歓迎してくれたパガンダを見捨てて逃げ帰るのも寝覚めが悪いですし。いっちょやったりしますか」

護衛隊群はパガンダを出港すると全速で大和モドキに向かって進み出した。

グラ・バルカス帝国が誇る最新鋭戦艦グレード・アトラスターの昼戦艦橋で艦長のラクスタルはぼおっと大海原を見詰めていた。

「艦長、パガンダまで約二十五海里。港に多数の艦影が認められます。パガンダの奴ら

は我々の襲来を見越して待ち受けていたみたいですね」

「身の程を知らぬ野蛮人どもめ。面白い！ 今回の戦いはハイラス様の弔い合戦だ。徹底的に叩き潰してやるぞ」

「御意！」

前回に訪問した者たちからの情報によればパガンダには大砲すら無いそうだ。飛び道具といえばバリスタで射る火矢くらいしかないんだとか。どう考えても負けるどころか苦戦すらするはずのない一方的な戦いになるはずだ。はずだったのだが……

「レーダーに反応！ 正面、距離…… ほとんど間近です！ 目の前にいるはずです！」「いやいや、どこに何がいるだつて？ レーダーの故障じゃないのか？」

「そんなはずはありません。何かが間近に迫っています。もしかすると…… 真上だ！ 真上に何かがいるはずですよ。防空指揮所！ 上空の……」

その瞬間、六機のF-35Bから投下された十二発の二千ポンドLJDAMが艦橋と高角砲群を木っ端微塵に吹っ飛ばした。

ヘリコプター搭載護衛艦いぶきのCICの大型モニターに映った大和モドキは爆炎に包まれていた。

「当たりましたよ。一発五百万円くらいとして十二発で六千万円ですか。効果はどんな物でしょう」

「どうですかねえ。艦橋は無茶苦茶になつてますけど五百ミリの装甲板に護られた防御指揮所は無傷なんじゃないでしょうか。とは言え、無線とレーダーと十五メートル測距艦を失つたら砲戦能力は激減でしょうけども」

「だけど、沈めるのは難しいですよ。こんな時、艦船か航空機から発射が出来る長魚雷があれば一発なんですけどねえ」

「う、ううーん。無いものねだりしてもしょうがないですよ。それに連中の規模が米軍なみだとしたら予想される戦艦は二十数隻、正規空母は三十隻くらいでしょう? その程度の敵のために新兵器を開発してたら採算が取れませんよ。今ある兵器で沈める方法を考えるしかありません」

護衛隊群は大和モドキへ向けて全速で進んで行く。

二十海里まで接近した所であきづき級護衛艦の六十二口径五インチ単装砲が火を吹いた。一隻当たり毎分二十発のペースで重さ三十二キロの砲弾が次々と発射される。

大和モドキは十五メートル測距艦が使えないため反撃することも出来ずに一方的に撃たれるままだ。

護衛隊群は距離を二十海里を保つたまま撃つて撃つて撃ちまくる。

数分後、即応弾を撃ち尽くした護衛隊群に静けさが戻って来た。

「これっぽっちも効いていないようですね？」

「いやいや、バイタルパート以外には意外と効いてるみたいですよ。特に艦首のダメージが良い感じですね。速度が随分と落ちているし、心持ち前傾してるようです。このまま行きますね」

「まあ、ミサイルに比べりゃ砲弾は安いですからね。これだけ撃つても五千万円かそこからでしょう？」

大和モドキの速度は二十ノット程度にまで低下していた。四十六センチ砲を撃つて来ない事を確信した護衛隊群は余裕を持って距離十海里にまで接近する。艦首、艦尾の非バイタルパートと煙突を徹底的に破壊して行く。

高角砲や高角機銃は壊滅しているようだ。山南艦長はここでAH-64Dの投入を決意した。だって陸自に無理を言っ出て出してもらったのに出番無しだと後で文句を言われそうなんだからもん。

「いったい攻撃ヘリに何が出来るっていうんです？ 豆鉄砲しか付いていないでしょうに」

「まあまあ、見ていて下さいな」

モニターに大寫しになったAH-64Dは大和モドキの四十六センチ砲の付け根に

M230 30mmチェーンガンを撃ち込む。二機のヘリからそれぞれ千二百発ずつの銃撃を受けた四十六センチ砲は大きな損害を受けているような、いないような。

念のためにロケット弾も撃ち込む。二機のヘリはそれぞれ四基のパイロンにM261ロケット弾ポッドを搭載していた。それぞれに十九発のハイドラ70が装填されている。百五十二発の2.75インチロケット弾を受けた四十六センチ砲の砲身は大きなダメージを受けている様に見えた。

「この後はどうすんすか? アレを沈めるのは大変そうですね」

「これ以上やったら弱い者虐めみたいで格好悪いですね。12式魚雷で舵とスクリューを破壊して終わりにしましょう」

「ここまでやったのに沈めないんですか?」

「放してやったよ(笑) って奴ですよ」

二人がそんな馬鹿な話をしている間にも護衛隊群は大和モドキ後方に肉薄すると次々に短魚雷を発射して行く。

だが、大和モドキの三枚翼プロペラは直径五メートル、重さ二十二トンもある巨大な代物が四基も付いている。しかも対潜水艦用に作られた12式魚雷の弾頭は潜水艦の複殻式船殻を破壊するための成形炸薬だ。そんなわけでさばり効果が上がらなかった。

「二十発くらい使ったんじゃないですか？ アレって一発何千万円もするんでしょう？
大赤字確定ですよ」

「やっぱ長魚雷を水上艦艇から発射出来る様にして欲しいですねえ。何とかならんもんでしょか」

「航空機から投下出来たら最高なんですけど。ヘリからなら何とかありませんかねえ」
「帰ったら提案だけでもしてみましようか。たぶん無理でしょうけど」

山南艦長は心の中のメモ帳に書き込んだ。

厚さ五百ミリのVH甲鉄に護られたグレード・アトラスターの防御指揮所で副長はガタガタと震えていた。

艦橋が吹き飛ばされたタイミングで艦長が死んでしまった。その時点で副長に指揮権が回って来ていたのだが…… どうすれバインダ〜！

ちなみに砲術長、副砲長、高射長、航海長、通信長も死んだらしい。既に主砲、副砲、高角砲、高角機銃は全て破壊されている。アンテナが破壊されたので通信も出来ない。先ほどの攻撃でダメ押しとばかりにスクリーンと舵まで破壊されてしまった。

こんな状況で何が出来るというんだろう。降伏か？ 降伏するしか無いのか？ だ

けど一発の砲弾も撃たずに降伏するだなんて相手にどう思われるんだろう。って言うか、そもそも何で攻撃されなきゃならんのだ? こっちは何も悪い事をしていないのに。

「もしかして、もしかしないでも俺たちは一方的な被害者なんじゃね? だったらやるべきことは降伏じゃないぞ。命乞いじゃんかよ!」

よかつたあゝ! 副長はほつと安堵の胸を撫で下ろす。いやいやいや、どうやって命乞いすれば良いんだよ? 通信が出来ないっていうのに。

副長は頭を抱え込んで小さく唸った。

第7話 滅ぼせ！グラ・バルカスを

中央歴1639年9月5日

グレード・アトラスターの悲劇から約一ヶ月。

レイフォルとパガンダには陸海空自衛隊の小規模な部隊の展開が始まっていた。

彼らとは別に防共協定を結んだわけではない。だから本当を言えば滅びようがどうしようが知ったことではない。

とは言え、乗りかかった船。毒を食らわば皿まで。一人殺すも二人殺すも同じことだ。なし崩しの日本国はグラ・バルカス帝国を相手に戦う事になった。

とは言え、実際には一方的な虐殺になるんだろうけれども。

だが、残念ながら海自では同じ時期にリーム王国の討伐も行っていた。そのために対グラ・バルカス戦に追加で送れる護衛隊群は無いのだ。

出来た事といえは弾薬と燃料の補給。それと潜水艦を四隻送る事くらいだった。

民間船舶を急遽改造して潜水母艦として随伴させるのが精一杯だ。

ちなみに海流に流されて浮遊していたグレード・アトラスターは潜水艦が長魚雷で葬った。

「勝てますかねえ、山南艦長?」

「いやいやいや! 勝手に戦争を始めたのはあんたでしょう、芹沢さん。いまさら何を弱気な事を言ってるんですか」

「あの、その、ええ〜つと…… 私は戦争を始めるのが好きなんです。だけど後がどうなるかと知ったこつちやないんですよ」

芹沢は人を小馬鹿にした様な薄ら笑いを浮かべる。山南艦長は啞然とした顔で小首を傾げる事しか出来ない。

「んじゃあ何で勝てるかなんて聞いたんですか?」

「どっちに賭けるか聞きたかっただけなんですよ。私は勝つと思いますけどね」

「私だつて負ける気はありません。賭けは不成立ですね」

「ううくん、何人死ぬかなんて賭けは流石に不謹慎ですしねえ。今回だけは止めておきましょうか」

二人は揃つて西の空に目を見やった。

グラ・バルカス帝国 帝都ラグナ

海軍省のとある会議室で三人の男女が顔を突き合わせていた。

東方艦隊司令長官カイザルが報告書を読み上げている。

「以上がパガンダ討伐に向かったグレード・アトラスター遭難事故の調査報告だ」

「よっしやよっしや、ご苦労さんでした…… って！ なんじやこりやあゝっ！ 三千人が乗った七万トンの戦艦が行方不明になって一ヶ月だぞ！ それは何も分からんとはどういうことだ？」

特務軍（旧監察軍）司令長官ミレケネスが盛大な乗り突っ込みを披露する。

「そうだそうだあゝっ！」

帝都防衛隊長ジークスも手を叩いて大喜びした。

「私は現場から上がってきた報告書を読み上げただけだ。文句があるんなら書いた奴に言ってくれ。んで、これからどうするんだ？ 私はこんな報告書を皇帝陛下にお渡しするのは真つ平御免の介だぞ」

カイザルだつてこれっぽっちも負けてはいない。人を小馬鹿にした様な薄ら笑いを浮かべると鼻を鳴らした。

「ううくん、分からん。さばくり分からん。しかし我が国が誇る最新にして最強の巨大戦艦が異常を知らせる暇も無く消息を断つなど常識では考えられんぞ。やはり異世界ならではの超常現象があるのではないのかな？ グラ・バルカスが国ごと転移して来れたんだ。グレード・アトラスターだけが元の世界に転移したという可能性もあるのでは

ないのかな?」

「あるのかないのかで言えば可能性はあるだろうな。つて言うか、他の可能性が思い付かん以上はそれで報告するしかないぞ」

「それよりもパガンダ討伐はどうするんだ? もう、なかつたことにしちゃうか? 復讐なんて何も生み出さないだろう」

「パガンダを滅ぼしたからつてお腹が膨れるわけでもないしな」

「そうそう、あんな酷い事をしたパガンダを許したグラ・バルカスは偉い! これぞ精神的勝利法だ!」

帝国の三馬鹿トリオたちは今日も今日とて無為な時間を過ごしていた。

ムーの最西端に作られた滑走路から二機のボーイング787-9の特別改造機が飛び立って行く。操縦しているのは促成教育を受けた空自のパイロットだそうな。

一万六千キロにも及ぶ長大な航続距離と意外に大きなペイロードを生かしてグラ・バルカス本土を爆撃する。そんな壮大で馬鹿げた計画の幕が切つて落とされた。

ちなみに芹沢は失敗する方に一万円を賭け、山南艦長は成功する方に賭けていた。

操縦席背後の狭い狭い補助席にムーの技術士官マイラスは押し込まれる。隣に座っているのは神聖ミリシアル帝国の情報局局員ライドルカだ。

「マイラスさん、ライドルカさん。狭苦しくて申しわけありませんねえ」

「いえいえ、グラ・バルカス爆撃に参加させていただけただけで光栄です。感謝感激雨あられですよ」

「それに我が国の飛行機械と比べたら物凄く快適ですしね」

客室を潰して作られた爆弾倉にはムーの焼夷弾とミリシアルの超大型魔導爆弾ジビルも一発ずつ搭載されている。

グラ・バルカス討伐は三ヶ国連合による共同軍事作戦であるというアリバイ作りのためだ。

高度一万三千メートルをマツハ0・85で飛ぶ大型機をグラ・バルカスのレーダーは百五十キロほど手前で発見した。

だが、彼らの戦闘機は一万三千メートルまで上昇することが出来ない。仮に上がったとしても追いつけない。かと言って正面から迎え撃つには速すぎる。

二機の787-9は悠々とグラ・バルカス最大の軍港に接近すると二千ポンドのLJDAMを十発ずつ投下した。目標は停泊している正規空母だ。寸分違わぬ精度で命中した爆弾は何隻かを沈める。沈まなかった残りも全て大損害を被ってしまった。

ついでに投下したジビルと焼夷弾も首都ラグナを瓦礫と消し炭へと変えてしまう。

翌日にも颯爽と現れた787-9は狙いを戦艦に変えて投弾する。だが、たかが二千ポンドの爆弾ごときで戦艦は一隻たりとも沈まなかった。しかし艦橋や煙突に大きなダメージを受けた戦艦は長期修理が必要になってしまう。

グラ・バルカスといえども馬鹿ではないらしい。三日目からは艦艇を湾外に退避させたらしく軍港はガラ空きになっていた。

だが、もとより空爆の標的は正規空母と戦艦だけだったのだ。新たな標的は滑走路や航空機格納庫に移される。

まあ、二千ポンド爆弾がたったの二十発なので効果はたかが知れているんだけれども。

小さな事からコツコツと。継続は力なり。何事も根気よく続ける事が大事なのだ。

芹沢と山南は相も変わらずヘリコプター搭載護衛艦いぶきの艦橋で西の空を見詰めていた。

「どうですか芹沢さん。二機の787-9で燃料代が一回当たり三千万円。LJDA Mが二十発で一億円。機体のレンタル料や整備費、エトセトラエトセトラ。予定は一ヶ月

ですから四十億円くらい掛かりますね。決して安くはないですけど六百ものピンポイント攻撃としては非常にコストパフォーマンスが高いんじゃないですか？」

「ですけど奴らはこんなものじゃ絶対には屈服しないですよ。それとも一年でも二年でも空爆を続けるつもりでしょうか？ 空自は」

「いやいや、これを一年続けたら五百億円にもなりますよ。それに空自に手柄を持って行かれるのだけは我慢がなりません。決着は海自が付けます。絶対にだ！」

山南艦長はまるで自分に言い聞かせるかのように呟いた。

イマイチ効果の上がない爆撃を二ヶ月続けた後、787—9は低空飛行を試みる。だが、零戦モドキが雲霞ウツカのごとく飛び上がって来た。

駄目だこりゃ。空自は787—9を四機に増やす。爆撃は航空機製造工場を対象を広げて継続された。

二ヶ月後、再び低空飛行が試みられる。だが、相変わらず零戦モドキは蠅の様に飛んで来た。

787—9は八機に増やされる。石油精製施設や発電所、浄水場、下水処理場、エトセトラエトセトラ。攻撃範囲を増やしてインフラを徹底的に破壊して行った。

爆撃作戦開始から半年間に八千四百発の二千ポンド爆弾が投下される。掛かった費

用は五百億円を超えた。

だが、グラ・バルカスは工場を山岳地帯の地下へと移して航空機の製造を継続しているらしい。また、航空機を守るためと思しき非常に強固な鉄筋コンクリート製バンカーが多数確認された。その中にはダミーも大量に混ざっていたようだ。

空自は787―9を更に増やして対抗するが爆撃の効果は次第に低下して行く。爆撃開始から一年目にして空自は遂に音を上げた。

グラ・バルカス帝国 山岳地帯に作られた帝王府地下壕

東方艦隊司令長官カイザルが報告書を読み上げている。

「地下壕の工場が本格稼働を始めたため、航空機の生産体勢は急ピッチで回復しつつあります。ただ、燃料や滑走路の問題から飛行訓練が絶望的な状況です。このため、初戦で喪失した操縦士の補充が全く間に合っておりません」

「ううくん…… 航空機を作っても飛ばす兵がいらないとは皮肉な話だな。ところで我々を攻撃してくる敵がいったい何者なのか、見当くらは付いたのか? 反撃の目処はどうなっておるのだ?」

手元の資料から顔を上げた帝王府長官カーツは小首を傾げる。

「稼働可能な艦艇をパガンダ方面に差し向けましたが潜水艦を含む全てが消息不明となっておりませう。敵の戦力、正体、目的の一切が不明。意思の疎通すら叶わぬ状況です。ハイラス様を殺したパガンダや宗主国レイフォルとは異なつた国が相手と考えられませう」

「反撃は不可能。交渉も出来ぬという事か。やはり何とかしてあの爆撃機だけでも撃退せねばならんぞ」

「現在開発中のターボチャージャーが完成すれば戦闘機は高度一万五千メートルまで上昇可能となります。速度も時速八百キロに迫る事でしょう。また、陸軍の十五センチ高射砲の製造も急ピッチで進んでおるそうな。必ずや撃墜出来るはずですよ。つて言うか、出来ないといふつちやいます。主に我々が」

「そうだな。出来たら良いなあ」

今日も会議は何の結論も出せないまま空転していた。

中央歴1640年9月1日

駐パガンダ大使の芹沢は大使館の窓から西の空をぼくつと見詰めていた。787—9は今日も上空を飛んで行く。俺もあんな風に空を自由に飛べたら楽しいだろうな

あ。

そんな馬鹿な事を考えているとドアが四回ノックされる。返事を待つ間もなく山南艦長が入って来た。

「芹沢さん。ようやく政府が重い腰を上げたみたいですよ。核兵器の投入を決定したそうです」

「核兵器ですと! 自衛隊はいつの間にかそんな物を作っていたんですか?」

「いやいや、ミリシアルやムーとの共同開発ですよ。古の魔法帝国のコア魔法に対抗する必要があるとか無いとからしいですね。動燃から接收したMOX燃料からプルトニウムを分離したんだとか。燃料級プルトニウムを使ってるんで一トン近くある巨大な代物なんですけどね」

「まあ、787-9を使っているんでサイズや重さは問題になりませんか。後は何発くらいでグラ・バルカスがギブアップするかですね。って言うか、グラ・バルカスとの外交ルートって確保されているんですかねえ?」

「いやいやいや、特命全権大使は芹沢さんでしょうに! あんた以外に誰がいるっていうんですか?」

「ですよねえ〜! しょうがない、今からでもグラ・バルカスに行きましょう。船を出してもらって良いですよねえ?」

全く悪びれる様子もなく芹沢は薄ら笑いを浮かべる。

山南艦長はがつくり肩を落とすと小さくため息をついた。

中央歴1640年9月10日 グラ・バルカス帝国 帝都ラグナ沖

護衛隊群は警戒態勢を維持しつつ港内を進んで行った。

空間線量計は毎時十二ミリシーベルトくらいの数値を示している。これは四時間もここにいれば年間の許容量を越えてしまうという放射線量だ。

「普通にヤバいっすね。無人偵察機を使った方がよかつたんじゃないやありませんか、艦長？」
「今さら言うても詮無き事ですよ。どうせここまで来たんですから行く所まで行ってみましょうや」

「いやいや、絶対に人っ子一人いませんって。更地になつてるかクレーターがあるかのどっちかでしよう」

「ですよねえ〜！」

護衛隊群は尻尾を巻いて引き返した。

グラ・バルカス帝国 山岳地帯に作られた帝王府地下壕

疲れ果てたといった顔の東方艦隊司令長官カイザルは薄っぺらい報告書を棒読みしていた。

「帝都ラグナがあつた場所は半径十数キロに渡つて完全破壊されておりました。恐らくは非常に強力な爆弾が使用されたと思われませんが正体はいまだに不明です。ただ、超高温と強い放射線が観測されたことから推測して通常の化学反応とは異なつた原理ではないかと思われます」

黙つて報告を聞いている帝王府長官カーツは憔悴しきつた様子だ。焦点の定まらない視線がちよつと怖い。

「二年もの間、精密爆撃を続けていたかと思えば急に帝都を丸ごと完全破壊とはな……敵の目的はいったい何なのだ? どうしてコミュニケーションが取れないんだ?」

「交渉の必要性を認めていないのではないではありませんまいか? 我々だつてパガンダを滅ぼすと決めた時、彼らの降伏を受け入れるつもりは毛頭ありませんでした。彼らが同じ考えに至つたとして不思議ではないでしょう」

「そうかも知れんな。そうじゃないかも知らんけど。だとすると我々はこのまま滅ぼされるしか無いと言うのか? そんな馬鹿な事があつて堪る……」

「重要会議中に失礼致します! 昨日、帝都を破壊した爆弾と同様な物が国内各地に投

下されつつあるとの報告が入りました。今現在、二十数発が確認されております」

その時、ふしぎなことがおこった！ 突如として大きなサイレン音が鳴り響いたかと思つた途端に物凄い衝撃が会議室を襲つたのだ。

カイザルやカーツは叫び声を上げる間もなく落下してきた天井に押し潰された。

こうしてグラ・バルカス帝国は滅んだ。

いや、彼ら正義の魂が死ぬはずはない。きつとどこかで生きているはずである。

もしあなたの身の回りで怪しい出来事が起こり、それが人知れず解決しているようなことがあつたなら、彼らグラ・バルカス帝国が活躍してくれたのかもしれない。

そして、帝国の三将カイザル、ミレケネス、ジークスに感謝をしようではないか

完